

行政説明

農林水産省 経営局 就農・女性課 課長補佐 尾室 幸子

ただ今、ご紹介いただきました、農林水産省経営局就農・女性課の尾室と申します。私からは本日、農業で起業する、あるいは農業法人に就職するといった、農業を始める皆さんに関する、農林水産省の取り組みをご紹介させていただきます。本日のこの機会を通じて、職業の一つとして農業を学生の皆さんに紹介してみたいというような感想を持っていただければ幸いと感じているところでございます。

さて、農業といいますと、どうしてもおじいさん、おばあさんがやっていて、あまりもうからないというようなイメージをお持ちの方も多いかもかもしれません。

わが国の農業界では今、大変な改革が行われています。一つは技術で稼ぐ農業ということで、先ほども第4次産業革命のお話がありましたけれども、ICTだとか、AIだとか、そういったものが農業現場で活用されてきております。例えば、GPSでもって、無人トラクターによる収穫が行われるとか、ドローンを飛ばして栽培管理をするだとか、そういった農業イノベーションが現場では起きています。2点目は、海外で稼ぐ農業ということで、今、輸出しやすい環境が整備されてきています。実際、輸出額も年々増加しております。ものづくりのお話も先ほどありましたけれども、我が国の農産物は高く評価されておりますので、今後輸出というものが稼ぎの中心の一つになるだろうと考えられているところでございます。そして3点目は、つながりで稼ぐ農業ということで、まさにバリューチェーン、生産者のこだわりだとか、さまざまな価値が消費者まで直接つながるというようなバリューチェーンをつなげることによって、もうかる農業を実践するという形になっています。こういう三つの柱、このような変革や変貌が今現場ではどんどん遂げつつあって、まさに若者、学生の皆さんの発想がこれから生きてくる、そういう農業でないかなというふうに考えるところでございます。

さて、現在農業をされている方の年齢構成をまとめたグラフでございまして。ご案内のとおり、先ほどからもずっと人口減少のお話がありましたけれども、農業の分野でも顕著でございまして。全体で今159万人。実に65歳以上の方が65パーセントを占めているということで、少しアンバランスな状況にあると言わざるを得ません。ただ、これは翻って考えれば、若者の方が参入するチャンスがあるというふうに言えるのではないのでしょうか。

まず、農業を始めるには三つのパターンがございまして。一つ目は1番の新規自営就農ということで、農家のご子息が実家を継ぐというパターン。二つ目が新規参入ということで、これは全く農業に関係ない学生さんとか、若者の方が自分で起業するという、まさにベンチャーのように起業するというパターン。それから、三つ目が雇用就農ということで、農業の現場でも今までは家族経営体というのが多いですけれども、どんどん法人経営体が増えてきてございます。ここに従業員として就職するというスタイルが増えてきております。

農業を始めるに当たっては、まず、従業員として就職をして、腕に技術を付けて、スキルを付けて独立をするというパターンが最近多くなってきてございますので、ここが注目されているところではないかなと思っています。それで、実際に新しく農業を始めた方の数でございます。上のほうのグラフは全年齢層でございます、例えば定年退職されて地元に戻ってこられる方などもいらっしゃいますので、だいたい、年間5万人から6万人の方が農業を始めていらっしゃいます。注目していただきたいのが、下のほうに伸びているグラフで、これは40代以下の方々です。直近の平成27年の数字では、2万3000人ということで、この10年間で最も多い数字となっております。

今年の3月に総務省が大変、興味深いプレスリリースをいたしました。どうも若者の間で、田園回帰が少し進んでいるのではないかなということで、多様な生き方、多様な暮らし方を志向するような、そういう考え方も浸透してきているのかなというふうに考えております。それから、下のグラフの、ピンク色の部分が、先ほど申し上げた、従業員として農業の現場で働く、雇用という部分なのですが、こちらも年々増加しているところが特徴的かなというふうに考えております。この背景は、まさに雇用の受け皿となる農業の、法人の数が著しく増加しているものによるものと考えております。この10年間で、大体2倍以上になりました。右側のほうのグラフには、一般法人の農業参入の推移とありますけれども、例えばイオンさんですとか、JRさんですとか、流通業や運輸業、建設業といった方々、さまざまな他業種の方も農業参入されていまして、そういった法人の方も雇用の受け皿になっているのが現状となっております。

さて、農業を始めた若者に農業の魅力についてアンケートを採りました。一番多いのが、一番左側の「自ら采配を振れる」とか、あと、「やり方次第ではもうかる」というようなビジネスとして魅力を感じていらっしゃる方、企業マインドを持っていらっしゃる方というのが大変多くなっています。それから、緑ですけど、「農業が好き」だとか、「農村の生活が好き」だとか、そういう農的な生き方に魅力を感じていらっしゃる方も根強くいらっしゃるような状況であります。これからのわが国の農業を力強く進めていくに当たっては、若い皆さんが新しく農業を始めるということが極めて重要だと、私どもは考えておりました、そのためにさまざまな施策を講じているところでございます。

まず、準備段階から、農業の研修を行うところから農業を始める段階、それからその後、経営を確立する段階まで、それぞれ政策をくまなく講じてございます。

例えば農業を新しく始める方については、初めの5年間、年間150万円を交付するというところで、スタートアップの時期を乗り切ってもらおうというような施策も行っているところでございます。そういった施策を進めると同時に、まず、農業に興味を持ってもらうということが大事だということで、情報収集、農業体験ということで、新農業人フェアという就活イベントを開催しております。全国でやっています。

それから、農業インターンシップ、先ほど来、インターンシップの話が出てきておりますけれども、農業でもやっています。ぜひ、ご紹介いただければと思います。それから、

私ども職業としての農業を知っていただくために、各大学さんに出向いてガイダンスを行わせていただいております。こちらは昨年度の事例でございますけれども、業界研究だとか講義の時間にお邪魔をいたしまして、農業界の最新状況だとか、あと、農業経営者さんに来ていただいて直接学生さんにお話をさせていただくだとか、そういった取り組みを行ってきました。学生さんからは、だいぶイメージが変わったと、自分が思っていた農業と全然違うというような感想を持っていただいております。本年度もこのような取り組みを進めておりますので、ぜひ、うちの大学でもやってみたいというようなお話があれば、この後、私ども農水省のブースでお待ちしておりますので、ぜひお立ち寄りください。

最後に今日は女子大の方々も多く参加しておいでですけれども、女性農業者についても少しお話ししたいと思います。農業者の4割が女性ということで、今、政府全体で一億総活躍、女性参画というのを進めているところですが、私どもも農業女子と呼んでいますけれども、さまざまなアイデアを企業さんとコラボレーションするというプロジェクトをやっています。参画企業さんは、もうすぐ30社になります。取り組みの例はこちらにございます。ぜひ、「農業女子」でホームページを、検索をしていただいて、生き生きと活躍している農業女子たちの姿をご覧いただきたいと思います。そして、もし、興味ある女子学生さんがいらっしゃったら、こんな取り組みもあるよということで、ご紹介いただければ大変ありがたいと思います。最後になりますけれども、この後、午後から情報交換ということで、私どものブースの他にも企業ブースに農業法人の方々に、多数参加していただいております。ぜひ、直接お話をさせていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。